

イノシシ被害の軽減をテーマに営農推進講演会を開催

国営農地開発事業北淡路地区における営農推進活動の一環として、淡路島東浦サンパーク（淡路市）において、イノシシ被害の軽減をテーマに「国営北淡路地区営農推進講演会」を開催しましたので、その概要について紹介します。

淡路市では近年深刻なイノシシ被害に苦しんでおり、電気柵や防護柵を張っても被害が減らない状況で、平成24年度は市内全域で約3,300万円の被害が確認されています。

このため、現在地元で取り組んでいる獣害対策のレベルアップを図り、持続的・継続的な取り組みに資することを目的として開催しました。

講演会では、①住民が主体となっていく獣害対策で成果を上げている島根県美郷町の取組事例の紹介、②獣害対策で陥りやすい失敗やその改善方法、の2つの内容で3名の講師からお話いただきました。

講演会は、農政局が淡路市、北淡路土地改良区等と連携して開催し、当日は受益農業者をはじめとして、地元行政関係者など、全体で約100名の参加がありました。



講演会のようす

講演1「点から線、そして面へ」。イノシシ被害に対する美郷町の取り組みについて

テーマ1:「人づくり」で住民主体の対策へ

島根県美郷町産業振興課 安田係長

獣害対策では、補助金だよりの画一的な対策に走るのではなく、「悩むことから始める」人が主役となった取組とすることが重要で、そうした取組とすることで、住民の笑顔や地域づくりにも結びつくことを紹介いただきました。

獣害対策の出口

獣害対策の出口（目指すもの）とは何でしょう。単にイノシシを獲ることではなく、農家の笑顔や人づくり、そして、地域づくりだと考えます。



点：獣害対策

線：獣肉利用

面：地域づくり



精肉から加工品・惣菜へ



獣害対策－補助金＝身の丈にあった対策

補助金だよりの対策では、防護柵を張ること自体が目的化してしまい、画一的な取組となり、ただ単に柵を設置すればよいとなってしまいがち。しかも、正しく設置されていない場合も多く効果も望めない。獣害対策イコール補助金事業となってしまうと、補助金がなくなってしまうと何も残らない。獣害対策から補助金を引いたときに残るものが沢山あるほど地域は上手くいく。残るものは何かというと“身の丈にあった対策”。

対策の出口を見すえ、悩むことから始める

獣害対策の向こう側にある“出口”を見すえて、地域の個性にあった取組としないと持続しない。一過性で終わらない対策とするためには、行政に任せるのではなく、自分たちがどうあるべきか、どうすべきかを考えて、悩むことから始める対策とすべき。行政はその動機づけをしてあげる。

対策の順序は、自助→共助（地域コミュニケーション）→公助（補助金）とすべき。

狩猟と駆除は別

本来、狩猟は趣味として行うもので駆除とは性格が異なるもの。猟友会に頼るばかりではなく、農家や集落の代表なども資格をとって、山奥のイノシシを獲るのではなく、田畑を荒らすイノシシを捕まえることを目的とした駆除体制を整えることが必要。また、捕獲と処理（殺処分）は別にすることも有効。

正しい知識とやる気さえあれば捕獲は女性でも出来、現に美郷町では婦人グループが駆除に貢献しています。



テーマ2: 獣害に強い地域をつくる ～美郷町婦人会の取り組み～

島根県美郷町連合婦人会 安田会長

獣害に強い畑づくりの研修農場「青空サロン」を主催し、イノシシの肉や皮を使った商品開発などにも携わる婦人会の活動を通じて、楽しみながら取り組むことの大切さなどを紹介いただきました。



良い指導者との出会い

婦人会で獣害対策に取り組み始めたときには「いつまで続くか・・・」と感じていた。今振り返ってみて、なぜここまで続けてこられたかを考えると、人との出会いが大切だと感じる。美郷町では、行政、研究者の方々に恵まれた。たくさんの情報があふれているなか、ぜひ良い指導者を見つけて取組を進めてもらいたい。



楽しみながら笑顔で取り組む

すぐに答えが出ない（効果がでない）ことであっても、そこであきらめてしまわずに粘り強く行うことが大切。粘り強く頑張っていると手伝ってくれる仲間も増える。仲間が力を合わせて頑張り、それが上手くいくとみんなが笑顔になれる。笑顔になるための頑張りなので笑顔で取り組めるようになる。地域の仲間と一緒に活動することでコミュニケーションも深まり、かつては厄介者であったイノシシが地域の宝ともいえる存在になっている。

これからも人との出会いを大切にして、無理せず前向きに取り組んでいきます。



講演2 イノシシ被害がなぜ減らないか。その原因と改善方法について

近畿中国四国農業研究センター 江口上席研究員

北淡路地区でも多く取り組まれている電気柵の正しい設置方法など、これまで自らが実践した観察や様々な実験などを通じて学んだイノシシの習性或各地で獣害対策を指導してきた経験を踏まえて、基本に立ち返った被害対策の実践に向けて、アドバイスをいただきました。



イノシシがなぜ人里におりてきたのか

イノシシは少量しかないエサを1日7~8時間も探し続け、食べ続けることでお腹を満たしている。自然界にはイノシシのエサは豊富にあるわけではないので、エサが大量に、高密度に、決まった場所で摂ることが出来れば、これ以上のことはない。そうした中で、田畑の農作物など人里には大量・高密度のエサがあることに気づいたイノシシが人里におりてくるのはあたりまえ。

おまけに、田畑の近くに耕作放棄地があれば、休息場所まで用意されていることもなり申し分ない。

イノシシは冬を越す

年間60万頭もの野生獣が駆除されている。それなのになぜ被害は減ってこないのか。

本来、野生動物には自然死の摂理があり、冬場にはエサがなくて自然死するイノシシもいるはずのところ、現状では冬場にも人間が採り残した果樹や、野原に捨てた野菜くずがあるほか、牧草の栽培などもあり、そうしたエサとする食べ物があることで生き残っているイノシシも多い。

電気柵の高さは20cmと40cmが基本

イノシシの場合、電気柵の線の高さは地面から20cmと40cmとすることが基本。20cmというのは、ちょうどイノシシの鼻が当たる高さということもあるが、地面から20cmという高さはイノシシが下をくぐれないと侵入を諦めてしまう高さ。



舗装道路からは離す

イノシシの鼻先が柵に触れた時、脚が土の上であれば電気が抜けやすいので「バチッ」とくるが、脚が舗装の上にあると電気が抜けにくいので、イノシシは「ピリッ」とするくらいになってしまって恐怖心をもつには至らない。電気柵を舗装道路の脇に設置する場合は、柵に触れたイノシシが少なくとも前脚だけでも土の上となるよう道路（舗装）端から50cm内側に設置することが大切。

ガイシは外側に

イノシシに十字架を見せるとまずはじめに縦棒の部分に触る。電気柵でいえば支柱に触ろうとすることになるので、このときにガイシが内側（ほ場側）を向いているとイノシシは何も感じないので入ろうとするが、ガイシがほ場の外側に向けて設置されていれば、「バチッ」とくるので柵に対して恐怖心をもたせることができる。



「獲って守る」のではなく「守って捕る」

捕獲して農地を守ろうということで、捕獲することに目が行きがちであるが、箱ワナや囲いワナなどを仕掛けても、田畑の対策が不十分であれば、イノシシは田畑の作物に向かってしまうので、獲ろうとしてもとれない。田畑での侵入防止策をしっかり行うことで、行き場のないイノシシは自然とワナに向かっていくことになる。